

拡張型心筋症

Dilated Cardiomyopathy

心筋症とは心臓を構成する筋肉である心筋に異常がおこり心不全を呈する病気で、命にかかわる重要な病気です。この心筋症には大きく分けると拡張型と肥大型の2つがあります。

拡張型心筋症は心臓のうち心室が拡張して収縮力が低下するために心不全をおこします。特に、ドーベルマン、ボクサー、グレートデン、セントバーナードなどの大型犬に多く発症する傾向があります。また、中型犬ではコッカースパニエルなどスパニエル種に多く見られることも知られています。

雄雌では雄が雌に比べると約4倍も発症する確立が高く、ほとんどどの年齢でも発症しますが、特に4歳から6歳あたりに多い傾向があります。

猫では、アピシニアン、ビルマネコ、シャムネコが他の猫に比べて高い率で発症しているようです。

原因

心筋症はほとんどが原因不明の病気で、まだまだ分かっていないところが多く、今後の研究が待たれるところです。犬のうちドーベルマン、ボクサー、コッカー・スパニエルは遺伝的要素が関与しているだろうといわれています。ただし、アメリカン・コッカー・スパニエルの拡張型心筋症はある種の栄養素が不足することによりおこるとの報告もあります。

また、猫の拡張型心筋症はタウリンと呼ばれる栄養素の不足に起因することが解っています。

症状

初期には無症状のことも多く、長年の間に徐々に病気が進行していきます。まず、元気がなくなる、疲れやすい、食欲がないなどにはじまり、歩けない、咳をする、痩せてくるなどが見られます。末期になると、呼吸困難、失神を起こしたり、立ち上がれないなどの症状がおこり、突然死もありえます。

猫の場合は上記に加え、後足の血管がつまり、前足のみでひきずって歩くようになる大動脈血栓症が見られることもあります。

診断法

まずは、聴診によりその存在を確認します。次にその状態を適格に把握するために心電図、レントゲン検査、超音波検査、心音図検査、時には血液検査などが必要になります。この病気の診断で最も確実で安全性の高い検査は超音波検査だといわれています。

この病気は検査によるストレスにより呼吸困難や突然死などの可能性もあります。症状によっては診断よりも対症療法を優先させなければならないことを理解しておいてください。

治療法

心筋症は原因不明でまだよく解っていない病気です。そのために適格な治療法というものが確立されていません。不幸にして心筋症と診断された場合には各種薬剤を用いて対症療法を行うしかありません。それには、強心剤、利尿剤、気管支拡張剤、抗凝固剤、微細栄養素など様々なものがあります。これらを症状の程度や進行状況などに合わせて単独あるいは組み合わせで用います。

また、塩分を抑えた処方食を与える食餌療法も効果的です。主治医の先生と相談して実施するといでしょう。

自宅での看護法

自宅でできることは処方された薬はきとんと与えることです。

この病気は延命を望むのであれば、基本的にはずっと投薬を継続する必要があります。

また、運動や興奮には十分注意して、食餌管理を適格に行うことは病気の進行を遅らせたり、寿命の延長につながります。

予防法

基本的にはありませんが、早期発見をすれば薬剤でその進行を遅らせることができる可能性のある病気です。そのため定期的な健康診断は役にたつでしょう。またアメリカン・コッカー・スパニエルにおいてはL-カルニチンとタウリンという微細栄養素をきちんと摂取させることは予防になるかもしれません。そのためきちんとしたドッグフードを与える必要があるでしょう。

猫においてはタウリン欠乏の食餌が大きな要因になります。粗悪なキャットフードを避け、ホームメイドの食餌を与える場合は注意が必要です。

メモ

この病気は基本的には回復は望めない病気です。そのことは十分に理解していただかなければなりません。投薬などにより一旦症状が安定しても突然の呼吸困難や突然死もあり得ます。